

私は数年前まで金沢大学で数学を教えていたものです。現在は石川県教職員組合のシンクタンクいしかわ教育総合研究所の共同代表をしています。今日は原告の一人として、原子力発電に関する私の考えを述べさせていただきます。

私は宮城県仙台市に生まれ大学院まで仙台で過ごしました。私が東北大学に入学した1968年は学生運動の最盛期で、東北電力女川原子力発電所の建設反対運動をやっていた同級生もいました。京都大学原子炉研究所に勤め反原発の論客として知られる小出裕章さんは、小出さんは工学部、私は理学部で面識はありませんでしたが、東北大学の同学年で同じキャンパスに通っていたはずです。しかし当時の私は原発問題に関心で、これではいかんと思ひ勉強を始めたのは、最初に勤めた北海道大学から金沢大学に移ってきた1984年の2年後に起ったチェルノブイリ原発事故が契機だったと思います。

そのとき原子力発電の危険性、原発立地の差別性、国際原子力利権の巨大さなど、様々なことを知りました。とりわけ原子力発電は人類がやってはいけないことと確信したのは、そこから生じるプルトニウムなど核廃棄物を、10万年にわたって管理保管しなければならないという事実でした。10万年と気楽にいますが、私たちホモサピエンスが東アフリカのサヴァンナに現れたのが約20万年前、アフリカから地球全大陸への拡散、いわゆる出アフリカを始めたのが約10万年前とされます。そのころの人類は文明というものを持たないサル的一种に過ぎませんでした。誰がそういうタイムスパンで核廃棄物の安全に責任を持てるのでしょうか。小泉純一郎元首相はフィンランドの10万年核廃棄物処理施設を見て脱原発派になったといます。小泉さんという政治家を私は評価できませんが、核廃棄物問題から脱原発派になったことだけは、人間としてまともな反応と思います。

さてチェルノブイリ事故後数年は日本でも反原発運動が盛り上がり、私も原発が建つ前の志賀町や関西電力が新規原発計画を持った珠洲市などに、反原発デモで出かけました。しかし問題意識を持続できる人は少なく、反原発運動の大衆的高揚もその熱気を徐々に失っていきました。その中で私はある予測をしました。「原子力発電所が稼働を続け、その危険性が続いている以上、危険が忘れさられたころ世界のどこかでチェルノブイリ級の事故が起こる」というものです。私も日本で起こるとまでは思いませんでしたが、その予測が2011年3月の福島第一原発での水素爆発によって当たったのはご存じのとおりです。

宮城県人だった私は、平安時代869年に内陸部の多賀城まで達した貞観の大津波のことを知っており、千年に一度の割合で東日本大震災並みの大地震、大津波が起こると分かってはいましたが、生きているうちにそれに会おうとは思いませんでした。大自然は人間の思惑と無関係に動くことを痛感しました。この大津波で多くの友人・知人が被災しましたし、私の親戚から死者も出ました。

さらに津波後の原発事故では、福島在住の大学の先輩・後輩の安否確認に忙しかったことが思い出されます。また私の生まれ育ったのは仙台ですが、本籍は宮城県の南端、福島県と

接する白石市です。私の半沢という姓はテレビドラマで有名になりましたが、全国的には稀な姓でその密集地は白石です。そこでの半沢には「鎌倉殿の13人」にも出てきましたが、北条氏に討たれた畠山重忠の乳兄弟・半沢六郎成清の子孫という伝承があります。白石が私の父祖の地で、私の両親もそこに眠っています。原発事故当時、東北各地の線量が詳しくネットにアップされていましたが、私の父祖の地・白石にも原発事故当地と遜色ない高線量のホットスポットが点在しているのに驚きました。セシウム137の半減期は約30年なので未だかなりの放射性物質が残っていると思われます。父祖の地の親戚知人特にその子どもたち孫たちへの影響を危惧せざるをえません。本当に原発事故というものには人間の手に負えないものだという事も痛感しました。

福島原発事故は原発を推進する人たちの無節操を浮き彫りにしました。事故当時「ストロンチウムは飲んでも大丈夫」と言った東大教授がいました。別の東大教授は「水素爆発は爆破弁」と言いました。「放射線はニコニコ笑っている人には来ません」と言った放射線医学の専門家もいました。当時私の造った「原発に御用学者の防御壁」という川柳を披露させていただきます。

私は福島原発事故で日本が大きく変わることを期待しました。しかし事故から11年経った今、年間20ミリシーベルトという放射線管理区域以上の危険地域への帰還が半ば強制されようとしています。福島県における子どもたちの大量の甲状腺がん発症が、原発事故によることを国は認めようとしません。さらに岸田内閣は原発再稼働どころか新規増設すら言い出しています。ドイツや台湾が福島原発事故を見て脱原発に国是を変えたのに対し、今の日本は大きく変わりませんでした。

少し変わったことはあります。原発の危険性を疑う言説は無くなりましたし、原発無しでも電力の供給はできることも常識となりました。原発再稼働差し止め訴訟、国や東京電力の責任を問う訴訟等でも事故前では考えられない原告側勝訴判決が出ています。しかし国の賠償責任を認めない今年6月の最高裁判決などからも分かるように、日本の司法の方向性は未だ分裂しています。

さてチェルノブイリ事故後の脱原発運動退潮時の私の予測「忘れたころ再び原発の重大事故が起きる」は、福島原発事故で的中しました。そして今、福島原発後の日本の司法の方向性が分裂している中で、私は第二の予測を立てざるをえません。「今日本が脱原発の方向を選択できなかった場合、忘れたころに日本は第二の大原発事故に見舞われ、そこでようやく脱原発に踏み切るが、そのとき日本は回復不能のダメージを受けている」というものです。地球上有数の地震地帯に老朽化した多数の原発をかかえた日本の未来をそう予見するのはあまりにも自然なことです。さらに、ひょっとしたらその大事故は、書類上動かないとされた断層が動き、その上で稼働していた志賀原発が全壊し拡散された放射性物質により能登半島一円が人の住めない場所になるというものかも知れないと危惧します。

以上、私の考えを述べさせていただきました。本訴訟の判決が、形式的な作文ではなく、現実に即し歴史の審判に耐えうるものになることを期待してやみません。